

### <あこのころの「誌要」>記録・記憶としての価値

田中, 優子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

16

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

2019-07-27

## 記録・記憶としての価値

田中 優子

一九七四年九月二〇日に刊行された『日本文学誌要』臨刊号で、当時の小田切秀雄教授は、「刊行にあたって」という文章を寄稿している。ここでは『日本文学誌要』が数年のあいだ無活動状態に陥り、停刊していたこと、この巻は一九七三年の秋から冬にかけて行われた日本文学科学生委員会主催の「文学講座」掲載巻であること、この巻が国文学会の活動再開と『日本文学誌要』復刊のための一つのステップとなることを期待して、法政大学国文学会が講座の経費を補助し、刊行の費用を負担したことを述べている。実際、『日本文学誌要』は一九七〇年三月二七日に刊行された二十二巻を最後に、一九七四年九月二〇日に至るまで刊行されていない。

この臨刊号には、小田切秀雄、柄谷行人、真継伸彦、黒井千次、後藤明生、長田弘、北川透、森川達也の各氏の文章が掲載されている。華やかな臨刊号によって、小田切教

授が望んでいた復刊は可能になったのか？ そうはならなかった。この巻の次は『日本文学誌要』第二三巻で、これは一九八〇年二月一〇日に刊行されている。五年半後である。私は一九七〇年に文学部日本文学科に入学して七四年に卒業し、そのまま大学院人文科学研究科に入って一九八〇年に博士課程を修了している。つまり私の在学中は『日本文学誌要』がほとんど刊行されていなかったのである。「あのころの誌要」について記憶をたどっても、記憶に残っていないのは当然だった。

大学院生のあいだ、私が寄稿していたのは大学院紀要、日本文学協会の『日本文学』、そして廣末ゼミのゼミ生が「牛王の会」という会を結成し、お金を出し合って作っていた『近世文芸ノート』という雑誌だった。書いた文字数に応じてお金を払う仕組みで、書きたくてしかたない私はずいぶん払っていたと思う。大学院終了後には廣末保先生、日暮聖さん、山本吉左右さん、岩崎武夫さんなどと一緒に「四三舎」という同人誌組織を作り、『試論』という雑誌を、これもお金を出し合って刊行していた。文学にとって結社が重要だというのは、廣末先生の一貫した考えだった。

一九七〇年代は大学にとって異常な時代だったのである。その背景には、学生運動があった。一九六八年に東京大学で医学部インターンの誤認処分があり、医学部が安田講堂を占拠したことで、大学は機動隊を構内に入れた。そのことに抗議して東大全共闘が結成された。同じ年に日本大学

で使途不明金が発覚し、ただちに日大全共闘が結成された。同じころ、パリでもドイツでもイタリヤでも、学生運動が起こっている。一九六九年の東大安田講堂の攻防と陥落はご存知のとおりである。当時、各大学の個別の問題を軸に日本の主要な国公立大学と私立大学の約八〇％に相当する一六五校が全共闘による闘争状態にあるか、あるいは全学バリケード封鎖をしていた。法政大学も同様の状況にあった。授業は続けられたが、たびたび構内に入れない状況があり、私自身も学内や三里塚での集会に参加していた。

私が入学した一九七〇年には、封鎖がより長引く事件が起きた。八月三日の六角校舎における殺人事件である。亡くなったのは国立大学の学生で、逮捕状が出た一三人のうち十一人が他大学の学生だった。六角校舎は閉鎖され、間もなく取り壊された。大学の周囲には鉄柵が張り巡らされるようになった。全共闘運動はセクト間の暴力によって弱体化し、学生による「自治」とは名ばかりで、セクトの資金源としての意味しかもたなくなっていた。運動の「退廃」である。文学部自治会は政治セクトの道具と化していた。この状況下で私は学び、現官房長官の菅義偉氏も、前沖繩県知事の故翁長雄志氏も、法政大学で学んでいたのである。このころ、四年制大学への進学率はわずか約一七%だったが、どの大学においても十八歳人口の急激な増加と進学率の上昇に、教育環境が追いついていなかった。全共闘運動とは、その悪化する教育環境のなか、経済成長と世界構図

に呑み込まれていく自己を、戦うことで取り戻そうとする行為だったが、私にとつて文学もまた、生きるために是が非でも必要なものだったのである。

一九七〇年代の状況が異常だったと書いたが、一九八三年七月二五日に刊行された『日本文学誌要』二八号には、「昭和三十年代の活動…国文学会の足跡(4)」という座談会が掲載されていて面白い。一九六〇年代の法政大学について、杉本圭三郎氏、西野春雄氏、片桐登氏、米山賢司氏が語っている。世界や日本で同時に運動が起こっていた一九六〇年代後半とは異なり、一九六〇年代前半は、法政大学には突出して激しい論争や運動があったことがわかる。ちなみにこの座談会で片桐登氏が岩波新書『日本文学の古典』に触れている。私が法政大学の日本文学科に入るきっかけになったのも、この『日本文学の古典』を高校時代に読んだことだった。実際に選択したのは近代文学で、小田切ゼミで学んだのだが、高校のころには日本文学全体が視野に入っていたのである。『日本文学誌要』は論文だけでなく法政大学日本文学科のなかの様々な動きを記録することで、重要なアーカイブになっている。

五年半の二度めの停刊ののち、再開された最初の巻である一九八〇年二月一〇日刊『日本文学誌要』第二三巻は、小原元教授と近藤忠義教授の追悼号であった。次の一九八一年二月四日に刊行された『日本文学誌要』第二四巻は、片岡良一著作集の刊行記念で、西尾実教授・重友毅教授の

追悼号でもあった。一九八一年十二月に刊行された『日本文学誌要』第二五巻は、長澤規矩也教授の追悼号だ。追悼によって日本文学科の教員たちの足跡をたどることは、法政大学で学んだ者にとって、自分自身を振り返る契機となる。いつも着物を着て教室に現れていた長澤規矩也教授や、益田勝実、杉本圭三郎、小田切秀雄、外間守善、表章、廣末保の各教授に、私は多くを学んだ。西郷信綱氏にもおめにかかった。授業回数が少なかったはずなのだが、鮮明に覚えている。それぞれの教授から学んだことは計り知れない。

一九九〇年三月二〇日刊行の四二巻は、「広末保教授退職記念特別号」だった。藤田省三氏と廣末保氏との対談「来し方…」や、岩崎武夫、山本吉左右、日暮聖、龍沢武の各氏による座談会「廣末保氏の問題意識をめぐって」が掲載され、私も「洒落本の空間」を寄稿している。一九九三年一月一日刊行の四八巻は、その廣末保先生の追悼号となり、葬儀における弔辞が掲載された。この年、私は英国オックスフォード大学における在外研究中で、急遽帰国したことを覚えている。一九九四年三月一日刊の四九巻は松田修・西田勝両教授退職記念巻、一九九五年三月二四日刊の五十一巻は外間守善教授退職記念特集号、一九九八年三月二四日刊の五十七巻は表章・杉本圭三郎両教授退職記念特集号だ。これらの教授の特集号で、私は在学中に聞いた講義や著書、などを思い出し、改めて日本文

学科で受けた学びの深さと大きさを再認識するのである。やはり『日本文学誌要』の記録としての存在意義は大きい。

(たなか ゆうこ・本学総長)